

情 報 局 編 輯

# 週 報

昭和十七年十月二十五日 第 418 号

五 錢

## 太平洋決戦 の火蓋切る

今だ、決戦生産を急げ

臺灣沖航空戦經過概要  
激化する帝國周邊の航空戦況  
適齡前の男子の兵籍編入  
陸海軍志願者の手引  
國民登録の實施  
戦時物資  
油 脂

十月二十五日 號  
418 號

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2

週 言

放送でこのたびの大戦果の報道を聞きながら、放送員がもつと繰返してくればよいと思ひ、新聞紙の大本營發表を讀み終つてから、再び紙を開いて轟撃沈と撃破の數を飽かず眺める。新聞社の建物の上方に現はれる電光ニュースを見るためにわざわざ電車から降りる。これがみんなの心持であつた。

みんなが戦つてゐる戦争であることが、今度くらゐはつきり分つたことはない。よくやつて下さつたと勇士たちに感謝しつゝ、自分もよくやつたと心の満たされる思ひである。

敵は比島に攻め寄せてきた。大へんな事態になつた。みんなで頑張らう。みんなの持つてゐる力を前線に凝集させ、再び敵を壊滅してやらう。その時こそ、もつとく大きな感謝と喜びに、みんなの胸は満たされるに違ひない。

# 今だ、決戦生産を急げ

待ちに待つた太平洋決戦の火蓋は切つて落された。幸先を祝ふ勢頭の一戦、瀛海沖航空戦は、敵機動部隊を追撃また追撃、轟撃沈敵五十数隻といふ素晴らしい戦果を収めて幕を閉じた。ハワイ真珠灣を襲ぐ大戦果であり、古來の戦史に類例をみざる輝かしきものであつた。敵敵今を討つ、一億の血は沸き、一億の感激は溢れた。

思へば二年餘、長い隠忍の日が続いた。押へつけられるやうな重苦しさが我々の心のどこかにこびりついてゐた。あのガダルカナルの轉進以來、太平洋の戦勢我に利あり、マキシ、クラワ、サイパン、大宮、テニアンと、全員戦死の悲報もつとき、我々は幾度か恨みの涙を呑み、憤りを胸をふるはせたのであつた。日本抹殺をさへ豪語して迫り来る敵不逞の倭攻作戦に對し、幾度か前線同胞は血の防波堤を築き、我々は悲憤を胸に秘めて營々戦力を養ひ、今日あるを期して來たのである。「今にみる」と一前線將兵は目に餘る敵の跳梁忙地剛太踏みながら戦機至るの速きを歎じ、銃後の生産陣また自らの送り出す新鋭機の出動が威力を發揮する日の至らざるに心を痛めてゐたのである。

一瞬、神氣發して戦機至るに至る。我々の期待は決して裏切られなかつた。「胸がすいた」「涙が止まらなかつた」といつただけではまだいひ足りない。「やつたぞ」「戦友相擁して泣くあの氣持、それがあの戦果の目以來の一億の心情である。掛ゆく人々の顔にも、工場で旋盤を削る人々の顔にも、鑛山で岩盤を取組む人々の顔にも、また野良に立つ人々の顔にも、いひしれぬ明るさが感ぜられるやうになつた。「やればやれるぞ」「やるぞ」――「努力が報いられたのだ」といふ戦ひ勝つた喜びと自信とが、今日の生活に張り、明日の勤勞に希望を與へたのである。攻勢轉移への希望の明るさである。恐らくこの明るさは日本だけの明るさではなからう。日本と共に米英露の共同戦争に協力を共にしつゝある大東亞十億の明るさであり、遠く歐洲に凄烈な試練と戦ひつゝある盟邦ドイツ國民への明るさでもあるに違ひない。

必勝の信念をはつきりと我々の胸に刻み込んだこの大戦果

のよつて来るころは何であらう。大御後威によることもよりであるが、寡を以て衆を破る日本兵法の妙義が戦機に投じ、決死必勝を期する卓抜せる統帥の妙策と相俟ち、前線將兵の生死を超越せる體當り攻撃によつて遺憾なく發揮されたものといふことが出来る。

「見敵必殺」の一念に燃え、荒天を冒しても敵機動部隊を求めて逃さぬ偵察機の殊勳、群がる敵直衛機の攻勢を敵散らして血路を拓いた戦闘機の勇戦、熾烈な敵防空陣幕の中に襲撃もろとも肉弾となつて敵艦に突込んだ攻撃機、基地にあつて三晩四日も不眠不休で働きつづけた不撓不屈の整備兵の奮闘、さへは基地建設に協力しつづけた現地住民の献身的活動等々、數へ上げれば切りがない。皇軍の傳統、日本精神の精髓が結晶してよくこの大戦果を生み、それはまた神州護持の誓ひも固く、敵の空襲に果敢に戦ひ抜いた沖繩、臺灣、比島等における軍官民一體の防衛精神に負ふところも大きかつたのである。わけても特筆されねばならないことは、今度の作戦には陸軍雷撃機も出動して、陸海、真に一丸となつて勇躍健闘してこの大戦果を擧げ得たことである。

しかしこの大戦果は、さきにも述べたやうに第一線の勇戦活躍に俟つばかりではない。實に銃後生産陣、否、一億國民の血と汗の努力、結晶の大戦果なのである。かゝる優秀な飛行機を數多く送り出した飛行機工場に働く人々の涙ぐましいうちにと、一日、半日の時を焦つて追撃戦に出て来てゐるのであるから、我々も一日、半日を争つて、戦力を補給擴充して、比島に延ばして来たマックアースの片腕を根本からへし折つてやらねばならない。日米死力をつくしての補給と生産のつばのせり合ひだ。かくして第二の決戦の火蓋は開く。現代戦は決戦に次ぐ決戦の連続である。決戦は一回限りではない。敵の大機動部隊を一回だけ殲滅すれば、それで萬事解決されたといふやうな生易しい性質のものではなく、今回のやうな激戦、否、それ以上の激戦を敵が屈服するまで繰返し繰返し敢行することによつてのみ、戦争に主動の地位を握むことが出来るのである。

これを思ひ、あの敵の戦意と作戦企圖を思ふとき、大戦果に酔つてゐたりする秋ではない。これからが勝負だ。今回の勝利は決戦の日の戦果であつて、本格的な決戦は實にこれからなのである。敵も全力を擧げて乗りかゝつて来た。實に容易ならぬことである。

戦機刻々と比島方面に熟するといへ、今後の決戦を敢行すべき時期と場所が何處に選ばれるか、もとより一に統帥の胸中に存することである。我々の窺ひ知ることの出来ぬところであるが、我々は精強神武の皇軍の至妙なる用兵作戦に絶對の信頼を寄せるとともに、皇軍をして十分なる戦果を收め、決戦をして見事な完勝を以て終らしめるため、必要な飛

4  
勞苦に直接負ふところはもろん大きい、これを造り出すまでに必要な石炭や鐵石を掘り、これを運ぶ人々、その人々に食糧を供給する農家の人々、また飛行機に限らず、あらゆる兵器や船や、國民生活になくてはならぬ數々のものを造る人々が、みんなそれ／＼無理に無理をして頑張つた甲斐あつての綜合戦果なのである。攻勢轉移のこのきつかけをつくり得たのは、いはゞ一億の勤勞戦、生活戦が齎した戦果、一億憤激の戦果ともいへる。

それだからこそ、あれだけの損害を敵に與へることも出来たのである。敵が太平洋兵力の片腕とも頼んでゐた虎の子機動部隊の過半を失つたことは、敵にとつても大きな痛手であつたことは想像できるが、敵もまたさるものである。こゝで息もつかせず、新機動部隊を動員して、強引に比島めざして突込んで来たあたり、戦意いよく悔るべからず、決戦様相はいよいよ本格的となつて来た。

来る十一月七日の大統領選挙を控へて、この惨敗を招いたルーズヴェルトとしては、どんなことをしても比島奪回の政治的作戦を強行する決意を固めてゐるであらうし、あの臺灣沖航空戦におけるわが損害が補給されぬうちに、空の隙隙を狙つて目的を達成しようといふのが肚の裡であらう。それだけに油断は出来ない。敵もこちらの補給が完了しな

行機その他の兵器の増産に一意努力を傾注すべきである。

あの輝かしい大戦果の陰には尊い犠牲が幾多あつたことを我々は決して忘れてはならない。未歸還機三百十二機、我もまた嘗てない大きな犠牲を出したのである。しかし勝機を掴んだ前線は敵の新たな攻勢を控へて士氣いよく昂揚必殺必勝の氣概すでに敵を呑む。

前線の銃後に期待するものありとすれば、一日も早く、一時間でも早く、撃敵の翼の大群が内地の工場からどつと鷲翼をつらねてやつて来てくれることだけであらう。五日間に三百機失つたのなら五日間に三百機造つて送らう。いや六百機に、九百機にして送り届けねばならない。

勝負はかゝる戦力の補給にかゝり、生産にかゝる。しかもその「時」にかゝる。皇國將來の運命を決する戦闘の火蓋切られるこの秋、飛行機もいくら來月の二千機や來年の五千機を約束してみたとて決戦には間に合はない。今日の百機、明日の二百機こそ、こゝ十日、二十日の千機こそ、前線の活躍を左右し、勝を決する鍵となるであらう。

あの臺灣沖航空戦における前線銃後一體の勝利の戦訓を生かし、「選れば勝つ」の必勝生産魂に徹して、たゞ一億、追撃増産への激進あるのみ。一億が眞に戦争一本になつて頑張り抜くならば、勝機正に我にあり。それこそ尊い忠魂に對し應へる道であり、聖慮を安んじ奉る唯一の道である。



# 太平洋決戦の火蓋切る

大本營海軍報道部

## 敵機動部隊の臺灣來襲

去る八月のハワイにおける太平洋作戦會議以來、ケベックにおける第二次米英會議、ワシントンにおける作戦會議と、相次いで對日作戦の協議に液頭しつゝ、頻りに比島奪還を鳴物入りで放言し來つた敵米國は、サイパン、テニヤン、大宮島のマリアナ諸島占領の勢ひに乗じて、比島への強引なる侵攻を指向しつゝ、あつたところ、十月十日に至り、敵機動部隊は突如、沖繩島、宮古島、奄美大島等の南西諸島に侵襲し、引續いて臺灣東方海面に現はれ、十二日以來、連續的に臺灣各地に大舉猛襲を加ふるに至つた。

すでに隠忍久しく、満を持して動ぜざる比島の我が陸、海空の精銳大軍を尻目に、我が内線深く侵入し來り、遂に琉球、臺灣にまで暴れ込むとは、傍若無人も甚だしき傲慢といはるゝか、大膽不敵なる排戦といはんか、まことに身の程を知らざる驕敵といはねばならぬ。

の緒を切つて、こゝに憤然起ちあがり、陸驚また吼を決して飛び上つた。そして我が陸、海、空、打つて一丸となつた火の玉の如き體當りによつて、物の見事に驕敵の頭に鐵槌の痛打を浴びせ、十二日より十六日までに臺灣ならびにルソン島東方海面において敵艦五十七隻を撃沈破して、敵兵力の過半を潰滅するの壓倒的大戦果を収めたのである。

## 比島奪還の野望を露呈

ルーズヴェルトも、ニミッツも、マックアーサーも、それに

航空母艦	十一隻	巡洋艦	二隻
戦艦	二隻	駆逐艦	十三隻
巡洋艦	三隻	その他火砲、火柱を認めたるもの	十二を下らず
航空母艦	八隻	撃墜	百十二機
戦艦	二隻	(基地における撃墜を含まず)	
巡洋艦	四隻	飛行機	未歸還三百十二機

チャーチルまでが比島奪還作戦を頻りに囑調度復してをり、従つて敵の當面の太平洋作戦の主たる目標が比島攻略に置かれてゐることは極めて明白であり、ハワイ作戦會議の終了に當り、ルーズヴェルトが「アメリカの當面の戦争目的はフィリピンを奪還して、日本を無條件降伏せしめることにある」と記者團に語つた言葉よりしても、敵の企圖は推測するに十分である。そして敵の比島奪還の目的が日本と南方占領地帯との補給連絡線を遮断して、日本の戦力の源泉を干上らせんとするにあることもまた、極めて明瞭である。このことはニミッツが

「太平洋において勝利を収める何よりの先決條件は、日本に對する海上補給線を支配してしまふことにある。この海上支配が確立されたならば、反復強軍は日本本土に對する原料の流入を阻止し、他方南方占領地帯に對する日本本土からの兵員ならびに軍需品の供給をも遮断することが出来る。」

と語つたことや、さらに別の機會において、  
「日本を打倒するためには、必ずしも日本本土への上陸作戦を絕對必要とするものではない。日本本土は今や食糧に困つてゐるが、その食糧は専ら海外に依存してゐるから、海上輸送線の封鎖により日本國民を飢えさせて戦争の終結を早めることは、決して不可能ではない。」

と述べた言葉などを綜合しても明らかなところである。そこで敵は、  
一、南方よりの戦争資源ならびに食糧の日本への流入を阻止し、

二、また日本よりの兵員、兵器などの南方占領地域への補給を遮断するため、  
是が非でも比島を強引に奪回せんと企圖してゐるのであつて、臺灣東方海面において叩き潰された敵は、十七日に至るや、太平洋の中央部隊と目される極めて優勢な機動部隊を以て、輸送船団を伴ひ比島中部のレイテ島に向つて侵襲に來り、比島奪還の野望を明らかに露呈するに至つた。

## 敵は短期決戦を企圖す

比島にしろ、臺灣にしろ、琉球にしろ、これを國防上よりみれば並し日本本土防衛線上の要點であり、従つてこの内線に突入するからには、敵もまたもとより莫大な犠牲を覚悟してをり、いかに敵は強に乘つてゐるとはいへ、敵もまたしかく簡單にその企圖を成功せしめ得るとは自惚れてゐないであらう。しかしそれをしも敢へて我が内ふところに飛込んで來て、我に挑戦し來るのは一體なぜであらうか。

その理由としては、まづ第一にギルバート、マーシャルへと侵襲し來つたニミッツ部隊が、最近サイパン、テニヤン、大宮島のマリアナ諸島を軍中に收め、さらに引續きペリリュー、アンガウル兩島に上陸して、西カロリン群島への侵襲に一應の成功を得るとともに、二はマックアーサー部隊はソロモン群島を北上、ラバウルの堅壁を完全包圍してニューギニア北岸の諸要點を奪取し、遂にビアク島を飛行石として長



たとひ戦線が兩國國境に立至らぬ前に抵抗を中止したとして、反側軍は兩國を完全占領するまでは進撃を続ける」と豪語してをり、また日本を完全占領することを前提とし「日本民族を地球上から抹消する」と、敵は既に全世界に向つて殊死極まりなき野望を公然と揚言してゐるのである。従つて、われわれ日本民族は皇紀二千六百年を最後として、遂に地球上から死滅するか、或ひは逆に敵を撃滅して世界を指導するかのいよ／＼最後の危急存亡の關頭に直面するに立ち至つたのである。否、われわれはどんなことがあつても絶対に勝たねばならぬ。何故なれば、畏れ多くも大日本帝國は天皇陛下の御守り申上げねばならぬ赤子であるからである。ソロモン群島の最南端ガダルカナル島をも席巻した我が軍が、その後僅か一年有半にして戦局逆轉し、遂に我が本土防衛内線の要衝たる比島、臺灣の周邊にまでも押し返されるに至つたのは、今さらいふまでもなく我が物量、とりわけ飛行機の數が敵のそれに壓倒されたからにはかならぬのである。従つて飛行機が敵に對抗し得るに足るだけの數さへあれば、斷乎、驕敵を擊退して大勝を収め得ることは、現に臺灣に來襲せる敵機部隊の大軍を皇軍が邀撃し、これに威嚇的打撃を與へ、算を亂して潰走せしめた事實が何より雄辯に物語つてゐる。

問題は飛行機だ。飛行機さへあれば立派に勝ち得るのだ。北はアッツ島に、南はギルバート島に、マーシャル島に、サイパン、テニヤン、大宮のマリアナ諸島に、壯烈悲慘なる全員戦死を遂げた陸海軍ならびに在留同胞たちは、この飛行機を生産するための「時」を鉄後に齎さんとして、悲壯にも肉弾の防壁をもつて、敵の壓倒的な鐵量侵寇の前面に立ちた。だかつたのである。われわれは誓つてこの護國の英魂に應へねばならぬ。そしてどうしてもこの戦争は勝たねばならぬ。勝利の鍵は絶対に飛行機の増産にある。さりとて飛行機を増産することは、決して一億國民悉くが飛行機工場へ殺到することを意味するのではない。今回の戦争は總力戦であるからして、一億國民がそれ／＼各自の職域において、一人の傍觀者もなく、一人の怠業者もなく、死力を盡して働くことがそのまゝ、飛行機の増産に繋つてゐるのである。故に、戦ひに勝つ途は唯一つ、一億悉くが死物狂ひになつてそれ／＼の職域において頑張り、頑張り、頑張り抜くことである。従つて、春秋に指を折り盡して白髮に呻吟した老爺にも、弱冠に歎息して机上に筆を止めた紅顔の學童にも、脂粉を搦つて決然工場に挺身した女性にも、今や日米決戦の一翼を分擔し得る戰場が與へられたのである。さあ、いよ／＼日米決戦だ。お互に頑張り。一億各自が死物狂ひで頑張れば、絶対に勝てるこの一戦である。

### 臺灣沖航空戰經過概要

十月十日 九月二十一日に比島海面に現れた大規模な敵機部隊は、延約五百機の艦載機をもつてマニラ市周邊に猛襲を加へ、我が軍の邀撃に遭ひ遁走すると見え、十月十日朝に至り、再び有力なる敵機部隊が、こんどは日本本土たる南西諸島近海に出現し、艦載機延約四百機をもつて四次にわたり沖繩島、宮古島、奄美大島に對し空爆を加へ來つた。

これに對し所在の我が部隊は直ち應戰、その二十六機以上を撃墜したが、我が方も地上並びに船舶に若干の損害があつた。

十月十二日 十日南西諸島に來襲した敵機部隊は更に南下し、十二日早朝より再び優勢なる航空部隊延一千百機内外をもつて臺灣に大空爆を加へ來つた。そして敵機は卑怯にも機腹に日の丸の標識を盗用し、しかも臺灣各地都市に對し無差別爆撃を加へ、天人俱に許さざる不法行爲を取へ

た。これに對し、隠忍久しく自重を續けてゐた我が陸海軍部隊に、遂に攻撃及び發進の命令が下つた。凄壯の鬼氣溢るゝ飛行場は、洋上決戦場に初登場する陸軍新銳雷撃機が、漆々たる砂塵を蹴つて勇躍進發する。この日拂曉、雲霧低く海面荒れる上を、低空襲下に浪しふきを受けながら難航の後、漸く敵機部隊を發見したが、敵は沖繩、臺灣の侵襲によつて我が航空兵力を潰滅したとも思つたものか、航空母艦を中心にして艦隊、巡洋艦等を配して、輪列陣を作つた數群が悠々と遊んでゐた。我が急襲に狼狽した敵が俄然密林の如き彈幕を打ち上げる中を、我が新銳機は相次いで急降下して體當りの魚雷を浴びせ、夜半に至り反復攻撃を加へ、同日判明せるもののみで、一隻、艦種不詳一隻、艦種不詳一隻、





害を興へた。  
しかしこの戦闘においても、敵艦と差違へて散った我が荒鷲の如何に多かつたことか。

十二、十三日の我が荒鷲の猛攻によつて、敵に興へた人員の損害は實に一万三千人、飛行機の損害六百機といふ大戦果を挙げたものとみられる。

轟撃沈 大型空母の乗員は、大體千五百人、中型空母の乗員は、大體千二百人として、今回轟撃沈した大型空母三隻で四千五百人、中型空母四隻で四千二百人、駆逐艦一隻の乗員三百人として、一隻撃沈で三百人、これを合算すると、敵艦轟撃沈による敵の喪失人員は合計約八千八百人である。

撃破 假りに艦乗組員の三分の一が艦内爆発で死傷したものと計算すれば、撃破空母二隻のうち一隻を大型、一隻を中型として、大型空母一隻撃破による人的損耗は五百人、中型空母一隻撃破による人的損耗は三百人、駆逐艦一隻は乗員千五百人として、一隻撃破による人的損耗五百人、巡洋艦一隻は乗員八百人として、これが撃破による損耗は二百五十人であり、艦種不詳のものは空母、駆逐艦、巡洋艦、驅逐艦などの平均数

だいたい一隻七百内外として、十一隻で七千七百、これが撃破によつてその三分の一の人員に損耗を蒙れば約二千六百である。

よつて敵艦轟撃沈による人的資源の損失は、合計一万二千九百五十の多きによるわけである。

艦載機 大型空母の搭載数を百機、中型空母の搭載数を六十機とすれば、大型三隻、中型四隻の撃沈によつて合計五百四十機を海中に居られ、また空母撃破による艦上機の損耗は搭載数の約三分の一として、空母二隻のうち大型一隻で三十機、中型一隻で二十機として五十機が破損し、これらを累計すれば、敵はその艦艇の撃沈破により六百機内外の航空機を失つてゐることは確實である。

十月十四日 敵は我が猛攻にも怯まず、なほも旺盛なる意をもつて十四日も早朝來、艦載機延約四百五十機をもつて執拗に臺灣各地に空襲を加へ來つた後、東方海面に逃走せんとした。

これに對し我が基地航空部隊は、時を移さず悪天候を冒して追撃戦を演じ、同日までに判明せる戦果に合計、轟撃沈、航空母艦

七隻、驅逐艦一隻、撃破、航空母艦二隻、艦載機一隻、巡洋艦一隻、艦種不詳十一隻といふ赫赫たる武功を樹てた。

敵は今までの太平洋島嶼侵襲作戦においては、空母勢力を集中して局地絕對優勢主義をもつて我を壓倒し來つたのであるが、今回臺灣の場合においては我が基地航空部隊は、敵の圖に乗つた艦隊勢力の近接を待つて斷乎反撃に出で、さらに逃走する艦艇隊を消撃して、敵機動部隊に對する我が基地航空部隊の優越性を遺憾なく發揮した。

敵艦轟撃沈は二回にわたる延約四百五十機の來襲に呼應するかの如く、支那大陸基地からもB29約百機が來襲したが、投擲せずして退去した。

十二日以後、臺灣各地上空において撃破した敵機にして、同日までに判明せるもの約百六十機である。

逃走する敵機動部隊の徹底的殲滅を期した我が陸、海航空部隊は、十二日來引續き反復攻撃を加へたが、この基地航空部隊の活躍に呼應して、我が海軍海上部隊も遂に斷乎出撃、こゝに空海協力による太平洋大決戦の前哨戰の火蓋を切つたのである。

十月十五日 臺灣東方海面をのた打ち廻りながら逃走する敵機動部隊に對する我が陸海基地航空部隊の長驅猛襲は十五日も引續き行はれ、同日までに判明せる戦果の累計は、轟撃沈、航空母艦十隻、艦載機一隻、巡洋艦三隻、驅逐艦一隻、撃破、航空母艦三隻、艦載機一隻、巡洋艦四隻、艦種不詳十一隻となつた。

ところが、かくて臺灣東方海面において散々に叩かれ、潰れ逃走する第五十八機動部隊を救助せんとして、敵は別働の機動部隊を比島東方海面に北上せしめ來つた。そしてその途中、比島方面の我が航空部隊の制のため、十五日朝マニラに對し艦載機機爆連合をもつて空襲を加へ來つた。

しかしこれより先、我が空襲機は既に敵機動部隊を捕獲し、基地航空部隊は指揮官機自ら先頭に立つて進軍し進襲、これに必中彈を浴びせた結果、轟沈、航空母艦一隻、撃破、航空母艦三隻、艦載機もしくは巡洋艦一隻、駆逐艦三十機以上の大戦果を収め、敵機動部隊北上の企圖を破砕したが、我が方また厚い未だ艦載機を出した。

十月十六日 かくて我が陸、海航空部隊は、十二日以來、臺灣東方並びに比島東方海面における引續く激戦において、十六

日までに空母十一隻、艦載機二隻、巡洋艦三隻、驅逐艦一隻を轟撃沈し、さらに空母七隻以上、艦載機一隻以上、艦艇もしくは巡洋艦一隻、艦種不詳十一隻を撃破し、合計敵艦艇の損害四十二隻以上に及び、空母のみにも實に十八隻以上を撃沈破したのである。



しかるに、敵はさらに十六日に至り、臺灣東方海面に制式空母、特設空母、艦載機、巡洋艦、驅逐艦等より成る有力なる別働機動部隊を出現せしめ、第五十八機動部隊の敗走を救助せんとした。

この急報に接した我が基地航空部隊は、同日午後直ちに進襲、敵艦直衛のグラマン戦

開機三十機と空中戦を演じ、その敵機を撃破して敵機動部隊に肉薄、白晝果敢なる魚雷攻撃を加へ、敵航空母艦一隻を炎上大破せしめ、艦載機一隻を撃破するの戦果を挙げた。

かくて、敵の別働機動部隊は我が猛襲に遭ひ、南方海面に退却するに至つた。

十月十七日 前日來、臺灣東方海面に現はれた新らしき敵の別働機動部隊は、十七日朝に至るや、その一部艦載機百數十機をもつてマニラ周邊に空襲を加へ來り、また一方、支那大陸より在支米空軍のB29約二十五機が臺灣高雄附近に來襲、我が制空部隊との間に激戦を交へた。

十月十八日 かくて臺灣東方海面において我が反撃に遭つてその過半数を失つた第五十八機動部隊は、南方海面に向つて敗走したが、十七日に至るや、さらに敵別働機動部隊は、上陸用兵員を満載せるものと判断される有力なる輸送船団を伴ひ、比島中部のレイテ島に侵入し來り、十八日午後からはレイテ島のわが陣地に對して、艦載機による爆撃と、海上艦艇からの砲撃を加へ來り、こゝに比島奪還作戦への野望を明らかに露呈するに至つた。

# 激化する帝國周邊の航空戦況

大本營陸軍報道部

## 敵の空襲意圖

大東亞戦争勃發三年を月餘に控へ、戦局の熾烈さは正に我々一億の胸に迫るものがある。殊に敵アメリカが無限と誇示する物産と、強靱無比と稱する補給の確保とにより、太平洋上は、或ひはまた支那大陸は、帝國の周邊に戰略的頭角を求め、對日航空包圍陣の完成を急がんとし、その間、有力なる機動部隊の連襲の下、比島、南西諸島、臺灣等に強引一點張りの侵攻を敢へてし、その相度わが猛烈果敢な邊境に遭ひ大敗北を喫したのであるが、これらの侵攻は、末期作戦のため、我が基地航空部隊の戦力破砕を目的としたものといへよう。彼等強襲の目的は、他くまでも帝國本土中樞部の工業力破壊であり、また、本土の

## 大陸基地強化に狂奔

いま敵アメリカ無慮の空軍總力攻撃をみるに、支那大陸にあつては、昨年五月十日、米國陸軍第十四航空部隊の獨立以來、その戦力増強は著るしく、さらに本年春、アメリカが對日本土空襲機の花形として世界に喧傳し、宣傳好きのアメリカが未だ嘗て歐洲戰場にもその姿を現はさしめなかつたB29をひそかに支那大陸に輸送し、このB29を主體とし、米國作戦司令部の直轄の下に第二航空部隊を設け、

日本本土への野望をますます大ならしめ、その戦力は輕視すべからざる勢を示すに至つたのである。こゝにおいて支那大陸におけるわが航空部隊は、あらゆる困難を排除しつゝ、さきに米第十四航空部隊の最大の前進根據地、獨逸飛行場を占領し、續いて零陵、丹竹飛行場を陥れ、賓陽、梧州などの基地を覆滅し、敵は早くもその前進中樞基地たる桂林の自衛を行ひ、この方面の殘存戦力を柳州に集結し、最後の反攻を畫策せんとするが、在支わが航空部隊は敵に立ち直る隙を與へず連續攻撃を反復し、敵に策を施す術なからしめ、殊に懸天候を冒し、成都を襲ひ、B29に對する先制奇襲攻撃を加へて大戦果を擧げると、その勢ひは正に支那本土をその蹄下にをさめんとし、破竹の

進撃を試みんとしてゐるが、これに狼狽したる支那空軍は、虎の子B29をインドに待避せしめんとする状況である。

一しかし敵空軍、殊にアメリカの攻撃も忘れ得ぬ日本本土空襲の念願は、その空中攻勢發端の地としての支那大陸基地を放棄し去るとは考へられない。第二航空部隊司令であつたウォルフが最近米本國に歸り、陸軍航空部隊司令部における航空資料運用の責任者の地位に就任した事實は、ウォルフの支那における豊富な經驗を基礎とし、B29の生産と補給とに重點を指向した敵米空軍の腹の底を示したものとみることが出来る。

今次米機動部隊の臺灣東方海上への出撃にあつて、臺灣に來襲するなど、戰意みるべきものあり、また月百四、五十機のB29を擧げて支那に補給し、我に挑戦するが如き、その不逞なる野望を直視し、これを破砕しなければならぬ。わが在支航空部隊として、支那大陸の驕兒アメリカ空軍に一大鐵錘を加へ、支那本土の制空權獲得のため、より多量の飛行機が今こそ絶対に必要なのである。

## インド方面戦機動

インド方面における米英空軍の兵力は逐次増加しつゝあることは確實で、彼等はガングス河の沃野、ベンガル地區に、コックスバザール、チャッタゴン、フエンニー、アコーラ、インパール、シルチャ、デズブール、テンスキア、ダッカ、ジェソール、カルカッタ等、百以上を算する飛行場を有し、いづれも多数の飛行機、電波兵器などによる有機的連繫の下に、この地をインド防衛の第一線とし、立體的に一大航空襲撃を完成し、我に挑戦せんとする勢ひを示してゐる。今その戦力をみるに、米第十四航空部隊は戦闘機P51を主力に、P38、P40などその機數二百機を越えんとし、爆撃機はB26を主力とし、B24、或ひはB29の一部を合せ、その數は二百機を數へられ、このほか英空軍のいはゆるベンガル飛行師團があり、その戦力は、戦闘機スピットファイアーI、ハリケーン合計三百機、爆撃機ウェリントン、ビューファクター、モスキートなど約百機と判明される。

をもつてコヒマ、インパール方面の地上作戦に、在支空軍の一部を含む米空軍主力をもつて怒江、北碛方面の地上作戦に協力しつゝ、天候氣象の好機に投じてわが要衝に來襲するなど、執拗なる出撃を續續する戰意もまた輕視できない。敵空軍の出撃は、雨期の間は全般的には低調であつたが、今や雨季明けとなり、この地區にも漸く戦機動がんとし、印緬國境を中心とし、さらにベンガル地區における敵航空部隊の襲撃が豫想せられる。

## 虎視眈々北邊を窺ふ

蘇つて太平洋を注視しつゝ、北アラスカ、アリューシャン方面においては、既に米國陸軍第十一航空部隊を設け、キスカ、アッツ兩島の奪回に成功するや、直ちに航空基地の設定推進を圖り、當時この地區の哨戒はもとより、B29を以て備へ、わが北千島に來襲したが、さらに最近に至つては、機種は次第に大型化し、B25、B24爆撃機を使用しはじめ、さらに重機PBRやを以て來り、從來、氣象的惡條件の故を以て北よりする進攻はとなく輕んじられる傾



向があつたが、近時における航空兵器のめざましい進歩發達は、完全に氣象の不測を克服し去らんとし、連日夜間の出撃を試みるなど、虎視眈々として北邊を窺つて、その出撃の都度、わが制空部隊の活動に阻まれてゐるが、物量依存の執拗さは必ずしも樂觀を許さぬものがあり、その不逞の野望に對して一日一刻の油断も許されな

### 執拗なる比島優寇の野望

また中南部太平洋方面においては、一昨年八月、ソロモン群島の一角ガダルカナル島にその有力なる航空部隊を進駐せしめ、對日總反攻の烽火をあげ、ソロモン群島を南から北へと航空基地の推進を圖り、いはゆる飛石傳ひの戦術により、皇土への肉薄を企圖した敵アメリカは、米陸軍第五、第七、第十三航空部隊をこの方面に集結するとともに、太平洋艦隊の主力を以て編成せる機動部隊との連繫の下、虎視眈々、その不逞なる野望を達成せんと努むる中、マツタラーサーはすでにモロタイ島に航空基地を推進し、ハルマヘラ、バンダ海方面の制

空權の獲得を狙ひ、機をみてボルネオ、ジャワ、セレベス地帯へ來襲し、わが資源地帯の擾亂政策を行ひ、また一方、ニミットの稱する中部太平洋攻勢は、さきにギルバート諸島、サイパン島、大宮島、テニヤン島を抜き、今やパラオ諸島の一角に地歩を占むるとともに、中部比島へその攻勢を指向せんとしてゐる。

しかも飽くことを知らぬ敵アメリカ焦慮の總反攻は、さきに大舉マニラを空襲し、次いで十月十日、第五十八機動部隊を以てわが南西諸島に來襲し、さらに十二日より三日間、空襲に對しその艦載機延一千四百機を以て反復攻撃を指向するに至つたのである。幾多の苦き試練に堪へつゝ、隱忍に隱忍を重ね、ひたすらその機至るを待ちつゝ、あつたわが陸海軍航空部隊は、神機到るや陸海軍緊密なる協同の下、驕慢米機動部隊に對する一大激戦を展開したのである。仇敵居るべしとなすわが燃ゆるが如き剛魂は、連日連夜猛攻を加へ、殊にこの戦闘においては、陸軍雷撃隊登場し、敵航空母艦、機艦を激撃沈してゐる。かくの如き陸海軍一體の猛攻のために敵機動部隊

は大なる損害をうけ、これと相呼應して支那大陸より來襲したB29も意氣あがらずといふ状況である。また徹底的打撃を蒙り、敗走する敵機動部隊收容のための他の機動部隊もわが航空部隊の發見するところとなり、猛攻を受け、こゝに臺灣、比島東方海上の一大航空戦は既に空母、戦艦、巡洋艦など、艦艇四十隻以上を一舉に太平洋の波深く居り去る大戦果を挙げたのである。敵アメリカが難攻不落の海上要塞と誇稱する得意の空母中心の輪型陣に甚大な打撃を與へたことは、御稜威の下、皇軍航空部隊の骨身をけつり、血のしたる日頃の猛訓練の賜ものであり、且つまた、過去一年有半、一億補償の戦闘の跡を偲び、すべての生活を一途に航空機増産のため結集し、協力した國民總戦起の結實ともいへよう。

今次臺灣沖航空戦においては、敵に甚大な打撃を與へたのはあるが、敵はその老大な物量に物を言はせ、中部比島方面へ執拗に攻勢をとつてきてゐる。われわれは依然必勝の信念を堅持し、總力を擧げて決戦戦力の増強に努めたいと思ふ。

## 適齡前の男子の兵籍編入

現下緊急なる戦局の要請に基づき、國土防衛の萬全を期するため、適齡前の男子も兵籍に編入し、適當の防衛名簿を適用することとされたので兵籍編入の手続について、兵役法施行規則を引用して解説することとします。この手續は義務であつて、必ず果さなければならぬものであり、また届出の手續が十分でないときは、折角のこのたびの措置も、その實效を收められないことを附言しておきます。

隊區司令官が管轄する第五十條 令第二十一條第四項ノ規定ニ依リ徵兵終決處分ヲ經ザル第二國民兵(海軍ニ召集セラレタル者及船員ヲ除ク以下同ジ)ハ之ヲ本籍所在ノ關係上、現役にも補充兵役にも

適せず、第二國民兵役に服する人があるが、これら適齡以上の第二國民兵と、今回新たに兵籍に入つた第二國民兵とを區別するため、後者は「徵兵終決處分ヲ經ザル」とを冠し呼んで「徵兵終決處分ヲ經ザル」として、一般には徵兵検査前と解して差支へありません。なほ、船員は當時海上に勤務するのが建前で、直接國土一兵籍/届

第二國民兵兵籍届	
一 本籍地	都道府縣郡市町村字番
二 本人居住地	例、氏、名
三 本人ノ氏名及生年月日	年、月、日
四 現住地ニ歸属シテ居ル年月日	年、月、日
五 學歴	何國民學校高等科修了(何學校修了)何年修了
六 職業	現時ノ職業ト就職年
七 年齢ニ達シタル日	昭和 年 月 日
八 戸主トノ關係	何親(三男)、「兄弟」トキハ戸主トシテハ戸主トシ、右及届出後也
九 本籍地	都道府縣郡市町村字番
十 現住地	何、氏、名
十一 戸主	氏、名
十二 親戚者	氏、名
十三 八後見人	氏、名
十四 何國民隊區司令官	氏、名
十五 何國民隊區司令官	氏、名



## 昭和二十年度 陸軍豫科士官學校生徒召募

陸軍では、十月十八日附の官報で告示されたやうに、航空関係の陸軍豫科士官學校生徒を召募することになりました。この召募には、二つの大きな特質があります。すなはち、その一つは全員航空であること、その二つは學科の筆記試験を廢したことです。なぜ全員航空生徒にしなかつたかといふと、いふまでもなく、前烈な大東亞戦争の戦闘方式は皆さんご承知のやうに完全な立體戦と化し、いかに精緻な陸海軍部隊をもつてゐても、いかに優秀な地上と海上の各種兵器を裝備してゐても、制空権のないところ、まづ戦ひの勝敗はないといふほど、飛行機の勝敗に及ぼす影響が甚大、否、むしろ飛行機のみにより勝ひの決がつ

くほど、唯一無二の不可缺兵器となつたからです。

地上、海上兵種もより必要ですが、目下緊迫してゐる情勢に鑑み、何はさて置いても必要なのは、飛行機とその搭乗員の飛躍的擴充強化です。このことは、このたびの東洋方面においての胸のすくやうな大戦果をみてもお分りかと思ひます。

あの花々しい戦果こそ、御稜威の下、弱冠二十二、三歳の空の現役青年部隊長の盡忠の精神から發してゐるのです。空の現役の若將校こそ、光輝あるわが神州の擁護者であり、米英撃滅の先驅者といつても過言ではないのです。このために陸軍では、このたび思ひ切つて空の將校生徒のみを召募することにな

つたのです。

次に、なぜ學科試験を廢したかといふと、斷じて

學力を輕視したのではなく、否、むしろ豫科士官學校の教育期間の短縮に伴ひ、

まず、學力を重視するために、學科試験はせむ存續せしめることについても慎重検討を加へたのです。しかしながら、國

家の大局から考へて、學徒動員の強化は極めて重要なことで、學徒をして専心作業に従事せしめ、作業能率を最高度に發揮せしめねばならぬ必要がありま

す。しかるに陸軍の將校生徒採用に依然學科試験を實施しますと、志願者に對し、體力的にも

非常な無理な負擔をかけ、時には熱心のあまり無理をして、優

秀者がかへつて身體の弱い者と

志願者別	年 齢	格 格	出 願 期 日	採 用 場 所
陸軍部外者	自昭和十五年四月二日生	採用時格 第四學年格	自昭和十九年十一月一日 至昭和十九年十一月十日	一、第一次検査 自昭和十九年十一月一日 至昭和十九年十一月十日 二、第二次検査 自昭和十九年十一月十一日 至昭和十九年十一月二十日
陸軍部内者	自昭和十五年四月二日生	採用時格 第四學年格	自昭和十九年十一月一日 至昭和十九年十一月十日	一、第一次検査 自昭和十九年十一月一日 至昭和十九年十一月十日 二、第二次検査 自昭和十九年十一月十一日 至昭和十九年十一月二十日
陸軍部内者	自昭和十五年四月二日生	採用時格 第四學年格	自昭和十九年十一月一日 至昭和十九年十一月十日	一、第一次検査 自昭和十九年十一月一日 至昭和十九年十一月十日 二、第二次検査 自昭和十九年十一月十一日 至昭和十九年十一月二十日

### 願書類差出要領 (志願者の差出すべき願書類及び差出先)

陸軍部外より 昭和十九年十一月十日までに  
陸軍部内より 終修學の學校長へ  
陸軍部内より 昭和十九年十一月十日までに所  
屬部隊長へ

なつて除外され、或ひは動員を怠つて勉勵するといふ者を生ずる虞れもあると豫想されるので、そのやうなことになること、國家的にみて、修學を中止してまで作業させてゐる學徒動員に悪影響を及ぼし、またこれを個人的にみても、眞面目に作業した者がかへつて不合格になると

## 海軍志願兵の手引

眞に國運を賭す太平洋決戦の火蓋が切られました。圖に乗る驍敵を邀へて、今ぞ精強軍が決然として立ち上つたのです。

の一念に燃えつきつてゐます。

この神驚、この海のはものに續くものは純忠の血に燃える君たち青少年諸君をおいては

かの誰でもありません。今こそ奮つて帝國海軍に身を投じ、光輝ある軍艦旗の下に斷

乎、皇國の護りに就かうではありませんか。

次に海軍志願兵のあらましを述べて、海に征く諸君の手引とします。

各兵種と職務の概要  
志願者は、まづ第一に自分の志願する兵種を定めねばなりません。

そこで次に述べる各兵種の職務の概要をよく研究し、自分の性格、體格、學力などを考慮して、自分に最も適した兵種を選ぶことです。

そして、希望する兵種は第一何々、第二何々といふやうに、なるべく三つは申出るのが

### 水 兵 (少年水兵兵、少年水兵)

水兵は海軍で最も重視する兵種で、大砲や水雷發射などの花々しい役目や、魚雷、機雷、羅針儀、電波探信機などの精密な機械の操作、或ひは各種偵察艦船の操縦運用など、海上戦闘や陸上戦闘などの主務になるものです。

志願兵として水兵に採用された者は、海兵團で約三月の新兵基礎教育を終ると、全部直ちに

次に述べるやうな各學校に選抜入校させられ、それら専門の教育を受けるのですから、優秀な頭腦と體格とが必要なのは當然で、特に艦船兵器がますます精密となり、高度に機械化されつゝある今日ではなほさらのことです。

(一) 砲術關係希望者  
海軍砲術學校(須賀と原也)に入校し、大砲探照燈測的、陸軍などに關する學術や技術

の教育を受けます。

(一) 水雷関係希望者

海軍水雷學校(須磨)に入校し、魚形水雷に関する學術や技術の教育を受けます。

(二) 機雷関係希望者

海軍機雷學校(須磨)に入校し、機雷、水雷、水中測的、掃海などに関する學術や技術の教育を受けます。

(四) 信號、氣象、操舵関係希望者

海軍航海學校(須磨)に入校し、航海、運用、信號、見張、氣象、防衛などに関する學術や技術の教育を受けます。

(五) 電測、暗號關係希望者

海軍通信學校(須磨)に入校し、電波探信機や暗號術などの學術や技術の教育を受けます。

(六) 潜水艦關係希望者

海軍潜水學校(大井)に入校し、潜水艦の構造、操縦、水中航行などに関する學術や技術の教育を受けます。

水雷、水中測的など、潜水艦に關する學術や技術の教育を受けます。

(七) 會計經理方面希望者

海軍經理學校(東京)に入校し、會計、經理、簿記、主計科に轉科する途もあります。

少年水測兵

敵の潜水艦または軍艦の所在を測定するのが主な役目です。

少年通信兵

無線電信、無線電話の取扱が主な役目です。

整備兵

航空機の整備、發動機および兵器の整備取扱が主な役目です。

機關兵

汽鍋、機軸、電氣機械取扱が主な役目です。

機關工業の作業が主な役目です。

工作兵

最初から海軍工作學校(須磨)に入校し、約二月の基礎教育の後、金屬工業、木工工業、施設工業別に特殊の教育を受け、鍛冶、機械、仕上、板金、鑄造、溶接、木工工業、建築土木關係の工業や潜水作業などに従事し、陸隊では工作隊員として活躍します。

この兵種は水兵とともに海軍における主な兵種で、海軍に教育終了後、試験の上、海軍工務學校(須磨)に入校し、種々の専門の教育を修得して艦船部隊に配属されます。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

實際の交戦などの際に榮を奏するのが主な役目です。採用者はすべて精選された海軍兵隊に入隊し、いはゆる海軍軍樂隊となります。

衛生兵

傷病者の看護、調劑、手術の介助、病的検査、エックス線器機の取扱、防毒および防疫の諸作業が主な役目です。

主計兵

海軍各基地で約一月の教育を受け、さらに海軍病院醫務部(各基地)で教育を受けます。

被服、糧食、醫品その他一般經理事務、和洋食調理が主な役目です。

主計兵には衣糧、經理の二方面があつて、衣糧の方は主として右の職務に従事しますが、初めの間は誰でも一様に炊事に従事することになります。

經理の方は別に庶務會計だけを掌るのですが、これは經理學校(東京)を卒業してからのことです。

練習兵

水兵、整備兵、機關兵、工作兵、衛生兵、主計兵のうちで、年齢が十四年八月一日以上十六年未滿(昭和十四年四月一日出生の者)の者は、入隊後練習兵と稱し、海軍各基地で約一箇年間の訓練、軍學、普通學、算學、物理、化學、國語、歴史、英語などの教育を受けた後、各學校に練習生として入校し、それぞれ専門の教育を受け、卒業後は特修兵と稱されて各種の重要配置につきます。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。

志願者の年齢と學力試験

志願者の年齢は、各兵種によつて定められ、採用の年、すなはち昭和二十年十二月一日現在で計算するもので、詳細は左表の通りです。









Table with multiple columns containing numerical data, organized into sections labeled 3, 4, 5, 6, 7, and 8. Each section includes sub-headers like '賞金' and '抽籤'.

Table with multiple columns containing numerical data, organized into sections labeled 6, 7, and 8. Each section includes sub-headers like '賞金' and '抽籤'.

